

飼育レポート

report.1 本州初のシマフクロウの繁殖に向けて

飼育展示担当 佐々木 祐紀

本州では初めてとなる絶滅危惧種「シマフクロウ」の繁殖を目指し、2023年9月21日に釧路市動物園からオスの「ココラ」が、9月27日に旭川市旭山動物園からメスの「アオハ(来園時はR青。のちに改名)」が来園しました。2羽が過ごしやすい環境を整えて準備していましたので、待ちに待った来園でした。アオハの到着日から2羽の見合いの開始となり、どんな行動をするのか、トラブルは起こらないか、などの不安を抱えながら動物舎を観察していました。

見合いは、2部屋に分けた飼育のため、仕切りの壁を金網に取り替え、互いに隣の部屋の様子が分かるようにしました。同居の際に金網の仕切りを外すと2部屋が1部屋になる仕組みです。



アオハ ココラ

金網の部分には止まり木を付けるとともに、網越しでの闘争に備え、透明な板を貼って直接爪が出ないようにしました。

室内に取り付けたカメラで行動を観察すると、見

合い初日は、アオハがココラのことが気になるのか長い間見ている状況が続きました。その後、止まり木に移ったり、足を出し合ったり羽根を膨らませる威嚇ポーズなどが見られましたが、大きな問題はありませんでした。

それらの行動も2日目くらいから見られなくなり、急にもう1羽が止まり木に来て平然としている状態が多く見られました。1か月を待たずに2羽を隔てていた透明な板も取り外し、次のステップへと進みました。今後もトラブルが見られず、鳴き合いが見られるとペアリングが良好で同居のサインになります。観察を続けながら、2羽が鳴き合うことを願うばかりです。



アオハ(左)とココラ



止まり木に止まるココラ(左)とアオハ

report.2 長い時間をかけたシュウの展示訓練

飼育展示担当(獣医師) 湯澤 菜穂子



2023年3月、オスのアムールトラのシュウが、当園で飼育展示しているメスのカサンドラのペアリング相手として、はるばる大分県の九州自然動物公園から仲間入りしました。

シュウは当園の飼育員にはすぐ慣れた様子でしたが、慎重で繊細な性格から屋外の展示場に出るのをひどく怖がり、なかなか外へ出ようともしませんでした。寝室では食欲旺盛なシュウも、展示場に置いたエサは取りに行こうとはしません。ただ、外に興味はあるようで、シュート(出入口)から外へ顔をのぞかせていました。シュウのペースで新しい環境に慣れてもらうため、展示場と獣舎内を自由に行き来できるようにして待つこと…半年以上!10月になっ

てもまだ展示場に出ていないことの方が多しシュウでしたが、初めは顔だけ外にのぞかせていたのが、肩まで、上半身、腰まで、とわずかずつながら前進してきていました。

シュート周辺からなかなか先へ踏み出せない期間が続いていましたが、夜間も展示場へ自由に出入られるようにして展示訓練を継続した結果、11月に急成長をみせ、日に日に行動範囲を広げていき、ついに展示場全体を探検できるようになったのです。12月は休園期間となりましたが、シュウはシュートを閉めても悠々と展示場を歩き回るようになり、プールに入ったり、展示場でも飼育員から肉を受け取ったりできる余裕も出てきました。

ぜひ、展示場でリラックスしているシュウに会いに来てください。



飼育員から肉を受け取るシュウ



悠々と展示場を歩くシュウ

report.3 ともに挑戦! ラクダのさっちゃん

飼育展示担当(動物専門員) 舘岡 幸枝

2022年8月に仲間入りしたメスのフタコブラクダの幸は、来園して約半年が経った頃、ごちない歩き方をするようになりました。獣医師とともに四肢を確認すると、球節という前肢の関節の曲がり方に異常があることが分かりました。このままでは近い将来、歩くことはおろか立つことさえできなくなる可能性が高く、命に関わります。

獣医師と話し合った結果、球節を元の位置に戻すため前肢にサポーターを巻き、ヒールのついたサンダルを履かせてみることにしました。そのためには、幸に前肢を触られることに慣れてもらう必要があります。

大好物の草食動物用ペレットを使用し、少しずつ触られることに慣れてもらった後、前肢を上げることも覚えてもらいました。幸は元々物怖じしない性格のため、怖がりたり嫌がりたりすることはほとんどなく、サポーターとサンダルを装着することができるようになりました。

また、骨や腱の状態を確認するためのレントゲン撮影も行い、少しハードルの高い「撮影用の台に乗る」という行動も幸はスムーズに覚え、無事に撮影することができました。

ラクダでは前例のない治療のため、試行錯誤の毎日ですが、

必ず回復すると信じて今後も獣医師と協力して全力で治療に取り組んでいきます。どうぞあたたかく見守ってください。



サポーターをつけるトレーニング



台の上に脚を乗せる幸



動物病院から

動物の検疫について

飼育展示担当(獣医師) 主席主査 小川 裕子

新たに動物園に仲間入りする動物は、病気がないか、伝染病に罹っていないか等の健康状態を確認するため、園内の動物病院で時間をかけて検疫します。動物病院に入れない大きな動物は、直接動物舎で検疫する場合があります。

検疫に時間をかける理由は、多くの伝染性疾患には潜伏期間があるからです。輸送中や新しい環境での生活は動物にとって強いストレスになり、ストレスを感じ免疫が落ちると、体の中に潜んでいた病原体が原因となる病気になりやすいのです。

今回は、メスのラマ2頭(モス・おはぎ)を迎えた時の様子を紹介いたします。モスとおはぎは空いている動物舎に入る予定だったことや、同じ動物園から来たことなどから1頭ずつ分けずに同じ動物舎で検疫を行うことにしました。

ラマは複数いても他の個体のフンに重ねるように1か所にフンをする習性があります。モスとおはぎは体格差がありフンの大きさが異なったため、識別しやすくスムーズに糞便検査ができました。なぜこんなことで喜んでいるかというと、もしフンに差異が無かった場合は、飼育員が張り込みをしてどのラマが排便しているか確認して採取するか、数か所のフンを検査することになった

からです。フンが取りやすかっただけで幸せを感じられるなんて、改めて獣医師はおもしろい仕事だと思いました。

2頭は搬入後数週間、病気やケガ等なく穏やかに過ごし、検査も異常が無かったため検疫終了としました。その後、おはぎは園内のお散歩トレーニングなどを行い、どうぶつパレードや写真撮影など大活躍しています。モスもトレーニングを始めていますので、今後が楽しみです。



秋のイベントでパレードに参加したおはぎ



到着直後のモスとおはぎ